

ヨハネの福音書 (59)

「12 弟子への顕現」

ヨハ 20 : 19～29

1. 文脈の確認

(4) イエスの受難 (18～20 章)

- ①イエスの逮捕 (18 : 1～11)
- ②イエスの宗教裁判 (18 : 12～27)
- ③イエスの政治裁判 (18 : 28～40)
- ④有罪判決 (19 : 1～16)
- ⑤十字架刑 (19 : 17～30)
- ⑥埋葬 (19 : 31～42)
- ⑦復活 (20 : 1～18)
- ⑧12 弟子への顕現 (20 : 19～29)

2. 注目すべき点

(1) 復活の主が与える 3 つのもの

- ①平安
- ②聖霊
- ③使命

(2) トマスの信仰育成から学ぶ教訓

- ①主は疑う者を見捨てない。
- ②見ないで信じる信仰が祝された。

復活の主は私たちの人生に必要なものを与えてくださる。

11 人の体験とトマスの体験からそのことを学ぶ。

I. 11 人の体験 (19～23 節)

1. 19～20 節

Joh 20:19 その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちがいたところでは、ユダヤ人を恐れて戸に鍵がかけられていた。すると、イエスが来て彼らの真ん中に立ち、こう言われた。「平安があなたがたにあるように。」

Joh 20:20 こう言って、イエスは手と脇腹を彼らに示された。弟子たちは主を見て喜んだ。

(1) 状況説明

- ①日曜日の夕刻（あるいは夜）のことである。

- ②弟子たちは夕食のために集まっていた。恐らく過越の食事をした二階部屋。
- ③彼らは、クレオパともうひとりの弟子の証言を聞いたばかりである。
- ④彼らはエルサレムとどまっている。ガリラヤに行こうとしていない。
- ⑤ユダヤ人たちを恐れて、部屋に鍵をかけて閉じこもっている。
- ⑥7 週間後のペンテコステの日の彼らの姿とは全く異なる。
 - * 彼らは、イエスとともに逮捕されそうになった。
 - * 彼らは、ユダヤ人の指導者たちを恐れている。
 - * 彼らは、死を恐れている。

(2) イエスは、恵みのゆえに彼らの前に現われる。

- ①締め切った部屋に入って来られた。
 - * 復活のからだは栄化されたからだである。
 - * しかし、十字架上で死ぬ前のからだとの継続性がある。
- ②彼らの中に立たれた。
 - * 復活の主の臨在は教会共同体の中心にある。
- ③「平安があなたがたにあるように」と言われた。
 - * 「シャローム・アレヘム」。ユダヤ人の通常のあいさつ。
- ④ここではより重い意味を持っている。
 - * 罪の赦しに基づく平和 (ロマ 5:1)
 - * 十字架による神との和解に基づく平安
 - * 恐れに支配されていた弟子たちの回復宣言
- ⑤その手と脇腹を示された。
 - * 復活の証拠性と贖いの永遠性を示す。
 - * 贖いの傷は永遠に残る。
 - * 「ほふられた小羊」として天で永遠に記憶される (黙 5 : 6)。
 - * 残された傷は弱さの象徴ではなく、救いの完成を示す栄光のしるしである。
- ⑤弟子たちは喜んだ。
 - * 恐れ→平安→喜び (ヨハ 16 : 20~22 の約束)

2. 21~23 節

Joh 20:21 イエスは再び彼らに言われた。「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」

Joh 20:22 こう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。」

Joh 20:23 あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦されます。赦さずに残すなら、そのまま残ります。」

(1) イエスは弟子たちに御子の権威を授けた。

①イエスは父の権威を受けて派遣された。

②弟子たちは、イエスの権威を受けて派遣される。

*大宣教命令のヨハネ版である (マタ 28 : 18～20)。

③「父→子→教会」という神の救済計画の流れに基づく。

(2) 「聖霊を受けなさい」

①イエスは息を吹きかけた。使 2 章では、聖霊が風のように下った。

*創 2 : 7 とのつながり

②ここでの聖霊の付与は、使 2 章の「聖霊によるバプテスマ」とは異なる。

③これは、みことばを理解させる力の付与であろう。

④新生と聖霊の内住が与えられたと考えることもできる。

(3) かつてペテロに与えられた使徒的権威が、全員に与えられた。

①「罪を赦す、罪を残す」とは、救いに関することではない。

②これは、新約時代の信者の行動規範に関することである。

③神の判断を宣言する権威が与えられた。

(4) 11 人に平安、聖霊、使命が与えられた。

II. トマスの体験 (24～29 節)

1. 24～25 節

Joh 20:24 十二弟子の一人で、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。

Joh 20:25 そこで、ほかの弟子たちは彼に「私たちは主を見た」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません」と言った。

(1) トマスはその場にいなかった。

①理由は分からない。傷ついた心の結果、「孤独」を選んだ可能性がある。

②不在が責められるのではなく、不信仰が責められるべきである。

(2) 交わりから離れると、信仰が弱くなりやすい。

①彼は、ほかの弟子たちの証言を信じなかった。

②見て、触れなければ信じないというのは、単なる不信仰ではない。

③絶望と傷ついた心から出てきた疑いであろう。

④主は疑う者を見捨てない。

(3) 弟子たちは、それ以降もガリラヤに向けて旅立たない。

①恐らく、トマスのゆえであろう。

2. 26～27 節

Joh 20:26 八日後、弟子たちは再び家の中におり、トマスも彼らと一緒にいた。戸には鍵がか
けられていたが、イエスがやって来て、彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」
と言われた。

Joh 20:27 それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

(1) 状況説明

①8 日後の日曜日である。

②弟子たちはまだエルサレムにとどまっている。

③この日、トマスは交わりに戻っていた。信仰回復のきっかけ。

④イエスは再び、恵みのゆえに彼らに現れた。

⑤主は責める前に「シャローム」を宣言し、信仰回復の道を開かれた。

(2) トマスへのことば

①イエスはトマスのことばを聞いていた。

②トマスのことばを正確に引用した。

③そして、愛の溢れることばを語った。

(3) 「ユダヤ的証拠要求」に対する主の応答であり、復活の事実を示す証拠である。

①2 人の証人による証言

2. 28～29 節

Joh 20:28 トマスはイエスに答えた。「私の主、私の神よ。」

Joh 20:29 イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信
じる人たちは幸いです。」

(1) 「私の主、私の神よ。」

①ヨハネの福音書のサブテーマの一つが、信仰と不信仰の対比である。

②イエスの敵の不信仰は進展し、最後は十字架刑でクライマックスを迎える。

③弟子たちの信仰も進展し、最後はトマスの信仰告白でクライマックスを迎える。

*主（キュリオス）＝権威者

* 神（セオス）＝礼拝の対象

④重要なのは、イエスがトマスの礼拝を受け入れたことである。

* 「ことばは神であった」（ヨハ 1 : 1）→「私の神」

(2) イエスの有名なことば

「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです。」

①これは叱責ではなく、祝福宣言である。

* 使徒的証人の信仰

* 後の信者の信仰

今日の信者への適用

1. 復活の主は「平安」を与えてくださる。

- (1) 恐れに閉ざされた者に主は現れてくださる。
- (2) 信仰が不安に揺れても、それは主から見捨てられた状態ではない。
- (3) 「平安があなたがたにあるように。」
- (4) これは、十字架によって成し遂げられた平和と赦しの宣言である。
- (5) 交わりから離れないことが大切である。

2. 復活の主は「使命」を与えてくださる。

- (1) 復活は終わりではなく宣教の始まりである。
- (2) 父→子→教会
- (3) 救いはゴールではなくスタートである。
- (4) 教会は「守りの共同体」ではなく、「遣わされる共同体」である。

3. 復活の主は使命を果たすために「聖霊」を与えてくださる。

- (1) 使命は自力では果たせない。力の源は聖霊にある。
- (2) クリスマンは「努力型信仰」ではなく、「聖霊依存型の信仰」へと導かれる。
- (3) ペンテコステの日に聖霊によるバプテスマが成就し、力が与えられた。